

## 「クワイダン」①

ホームに立つ僕の深呼吸は今日も少しだけ震えている。12時40分。蔵前駅から日本医大病院前駅に向かう東京メトロ浅草線、前方4番目の車両、最後部ドアから乗車する。この時間、車内には空席が目立つが、僕はまだ座らない。扉を左右にしてその真中あたりに立ち、進行方向を凝視する。先頭車両と運転室を隔てる扉が、電車の蛇行に合わせて右へ左へと隠れては現れる。前方車両の動きがいち早く確認できるので、多少大きな蛇行もバランスを崩すほどではない。浅草駅で半数以上が下車すると、座席を占める乗客はまばらとなる。僕はまだ立ったままだ。ノート・パソコン用の鞆を右手に提げたま、左右に振れる電車の前方に向かって長く延びる空間から、瞬きをする以外は目を離さない。地下鉄は新東京タワー建設予定地の真下辺りをかすめるように東へ向かい、そのまま京成線に乗り込み、曳舟駅の手前で地上に出る。

僕は窓の外に目をやり、急に広がった空間を確認すると、今度は目を閉じて3回大きく深呼吸をする。やっと座れる。ズボンのポケットから iPod を取り出すと、ガスティネルのチェロ・コンチェルトを選び、すでに首から下がっていたイヤフォンをしっかりと耳に押し込む。ジャケットの内ポケットから眼鏡を取り出して掛け、鞆の右隅でサンドイッチの隣りに収まっているロウブ古典叢書版ストラボン『地誌 3』を取り出した頃、脈拍は正常値に戻っている。閉所恐怖症。鞆の外付きポケットの右端に並ぶ四色のジェルペンからグリーン・ブラックを取り出して右手に持つと、ここから約40分は読書に集中できる。印西牧の原駅に着くまで電車は2度トンネル内を通過するが、それは各々30秒ほど。目を閉じたまま、田返し前にれんげ草が覆いつくした薄紫色の出雲地方―僕の幼少時代を包みこむ途方もないほど広い世界―を頭の中で思い描いていけば、それで今日もやり過ごせるはずだ。

下車駅から歩いて20分のところにある小さな大学で、新約聖書、古代ユダヤ史、それにギリシア語を教えている。非常勤講義と通訳からの実入りは少ないが、独りで静かに毎日をやり過ごすのにあまり支障はない。僕がこの大学で教えはじめた3年前、印西牧の原駅前にはスーパーが1つ、その回りに高層住宅がぼつりぼつりと立ち並び始めているだけだった。今年にはいると、駅のあちら側にはショッピング・モール、家電小売店、ホーム・センターが、こちら側には大きなパチンコ店と「ゲーセン」が矢継ぎ早に出現した。閑静なベッド・タウンに居を構えたつもりでいる住民が戸惑いを覚えるのをよそに、学生たちはバイト口が急増したことを喜んでいる。「ウチに来てくれたら良い台を教えるよ」と学生に言われるが、僕にはギャンブルをするだけの強い心がない。だから「良い台は教えなくて良いから、景品だけくれ」と言ってお茶を濁す。

大学に通ずる公園通り、草いきれかき分けてアスファルトの小径を急ぎつつ、講義の手順を頭の中で反復する。今日は2コマ。まずはギリシア語だから、単語テストをする、課題の作文を返却してコメントする、そして第12章は不定法の語形変化と用法…

左足つけ根のあたりがこそばゆいと思ったら、携帯電話がポケットの中で振動している。汗だくのポケットからケータイを取り出すのは容易でないが、何とか間に合った。ほぼ真上から降り注ぐ太陽光を反射した表示画面に、しかめた目を凝らす。叔母からだ。

去年の神在月、祭りのはじまる3日前に亡くなった叔母からの電話が、僕の手の中で震えている。

(つづく)